

北辰会の皆様へ

2020年7月16日
23期常任幹事 畑地 豊



今回は23期で唯一の医学博士/学位取得者である「荒木康久さん」を紹介させて頂きたいと思います。

23期のホープ/荒木康久さんが医学博士の学位を受けられたのは1989年ですから、既に30年経っています。もっと早く皆さんにこのことを紹介させて頂くべきだったなと、いささか遅きに失した感は否めませんが、このことは当のご本人さん並びに北辰会生の皆様に深くお詫びするものであります。

不肖私は23期の幹事を2017年に仰せつかりましたが、この時から“荒木君の業績”を近いうちにご披露させて頂きたいなあと、その企画を胸に秘めご本人にも相談しながら原稿の整理など準備を進めていました。そこへ数日前に前田事務局長からこのことの相談をいただき、意気投合、「すわ！実行急ぐべし！」と、一気呵成にスピードをあげてきた次第でした。

私は彼の業績を紹介させて頂くにあたり、必ずこのことを先にお伝えさせて頂きたいと思っていることが有ります。それは私達「北野」で学んで来た多くの“北辰会生”が置かれてきた背景をしっかりと認識して、彼の成果を評価してあげて頂きたいと思うのです。否それは彼一人では有りません。私達“北辰会生”全員がともに認識すべきある“誇り”と言っても過言では無いと思うのです。



北辰会

彼は鳥取県西伯郡大山町の中学校卒業と同時に、兵庫県伊丹市内の現代の三菱電機伊丹製作所に就職の為、単身で故郷を後にします。

単身で故郷を後にするのは、不肖この私も同じでした。否、多くの北辰会生の皆さんも多かれ少なかれ、同じ道程で有ったであろうと拝察いたします。

たとえ片親育ちの境遇であったろうに

せよ、それまでは親元で親と一緒に生活し、中学校にも不自由なく通学させてもらい、三度三度の食事もあてがってもらっていたのです。



現代の三菱電機伊丹製作所

何といってもまだ齢若干15才です。それが卒業とほぼ時を同じくして、親や縁者と離れ離れとなって、一人で、殆どと言っていいほど誰一人知り合いのいない、距離のうんと離れた都会に旅立って行くことになるのです。武者震いどころか、多少の不安感と、緊張感を持って、己に勇気を持ってと言い聞かせながら、夜行列車で都会に向かっていったのです。

彼はまだ安定した大企業の“寮”と称する宿舎に落ち着きます。三度の食事やお風呂も設備が整っています。

私はそうであったとは申しませんが、人によっては自分で間借りの部屋を探して、自分で稼いで家賃を払い、自分で食費の計算をしながら生活をする。裸一貫で故郷を後にして出てきたわけですから、自分で生計を立てて行くのです。そして夜は“北野”に通学し、睡魔と闘いながら勉学に勤しむ。

今から思うと「小さな精神で良く乗り越えて来たなあ！」と思うこともあります。



北野高校 / 旧本館
夜間の事務室付近の風景

そして荒木君もまた「裸一貫」から自分ひとりで道を切り開き、念願、悲願であった「医学博士」の学位を取得されるまでの道のりは、決して並大抵のことでは無かったことでしょう。下世話な話で恐縮ですが、医学はやたらとお金が掛るものです。学問書物一つを取ってみても、不肖、私が修めた経済学士のそれとは雲泥の差と申しても過言では無いと思います。何度も申しますが、裸一貫、己で稼ぎ、小さいながら突然一家の長として、学費や生活費を賄ってきたのです。生活を支えるだけでも大変なのに、学位取得に向けて、学費を捻出しながらこの奮闘が始まるのです。これはもう「偉大なる“苦学力行”」と言わずしてなんと申せましょうか！このことを強くお訴えしておきたいと思うもので有ります。

校 歌 ▶

上のボタンをクリックして「校歌」をお聴きください（開いたページの「校歌」の文字の下に青字「校歌合唱を聴く」をクリックすると聴くことができます）。在学中にこの校歌を唄う機会が何度かありましたが、勇気を奮い立たせて唄ったものです。しかし今この文章を書きながら聞きますと、不思議と涙腺を刺激され、涙目になって感動に誘われてしまいます。さあ元気な皆さんは、いかがな反応を示されるでしょうか？

◆北野時代も今も彼の人となりは変わっていないと思います。すごく謙虚で、そして気さくで、心優しい、落ち着いた学者さんというより、社会人と言う方が当たっているのでしょうか！

クラスではいつも周りの人を楽しい雰囲気を持っていくのが上手な人でした。機知に富んだ上品なユーモアを振りまいてくれる人でした。手品の腕前もすごく上手でした。しかしそれを取り立てて自慢しないで、軽くさらりと突然実行して、もっと見たいと思っても、易々と調子に乗らないで控えめな謙虚さを有する人でした。今でも老人ホームなどに慰問の活動が続けておられるのでしょうか？

1966年/彼が岩手大学時代に、私が北海道に6か月間遊学することとなり、途中“盛岡駅”で下車して、まる2日間彼の下宿に逗留してお世話になったことが有りました。

1971年/私が結婚の時は司会を引き受けてもらい、大学のある群馬県前橋市から大阪まで来て頂きました。

そして翌年の1972年/には彼の結婚式でした。私が大阪から前橋に出向き、これまた司会をさせて頂くこととなりました。そんな間柄だったのです。

鳥取県⇒兵庫、大阪⇒岩手そして群馬県と学問中心の生活が続きますが、当時の前橋界隈では有名であった“美人3姉妹”の荒木家の次女である“ひろ子さん”との婚儀がまとまります。彼はご両親から乞われて荒木家に“婿入り”することとなり、山根姓から「荒木姓」となります。

良き人生の伴侶を得て、この群馬県を中心にさらに新たな学究生活が続きます。念願の学位取得に続き、念願の“海外留学”も果たし、ますます学問研究にその力量を発揮していくことになるのです。

内にあっては1男1女そしてその3人のお孫さんに恵まれ、今は愛妻（ひろ子様）と新婚時代そのままの2人でのハッピーな生活を有意義に送られながら、なお一層の医学を中心とした学問研究に余念がありません。

私達23期生は、彼がいつか“ノーベル賞候補”とセンセーショナルな記事が新聞紙上に躍り出ることを夢見て、彼を変わらない気持ちで応援したいと思っています。（完）



荒木さんの結婚式（1972年5月吉日）

荒木さんからの謝辞

畑地豊さんより、「昔、学位取得に至る君の手記を読んだことあるけど、あれを北辰会だよりに載せたい」旨、連絡を受けました。「既に以前のものであり、古いものであるが構わないの？」と返事するや、例のバイタリティーある声で、「私に任しときなはれ！」と言うや2日後に綺麗な色合い構成、イラストを含めて、全て畑地さんが作成頂いたものを見せて頂きました。北野時代から半世紀は過ぎ去り、手記を記した時点から更に30年の星霜は過ぎ去りましたが、基本的な人生観は変わっていないことに気づきました。これも、畑地さんの声掛けで、回顧する機会を与えられました。



在校当時の学校風景

荒木 康久 (旧姓 山根)

あらか やすひさ

出身地は鳥取県 (1943年04月08日生)



略 歴

- | | | |
|---------------|---|--------|
| 1964年 | 北野高等学校卒業 (懐かしい心の故郷) | |
| 1968年 | 岩手大学農学部畜産学科卒業 | |
| 1968年 | 群馬大学医学部勤務 (産婦人科教室・生理学教室) | |
| 1972年~1993年 | 産科婦人科 館出張 佐藤病院 勤務 (高崎) | |
| 1989年 | 医学博士取得 (群馬大学) | 「支柱」手記 |
| 1993年 | オーストラリア, PIVET Medical Centre にて生殖医療の研修 | |
| 1993年 | 高度医療技術研究所・中央クリニック(所長)(栃木県) | |
| 1998年~1999年 | イギリス, The Park Hospital Centre for Assisted Reproduction 留学 | |
| 1999年~ | 高度生殖医療技術研究所(ARMT)(群馬県)所長、現在、顧問 | |
| 2014年~ | 日本リプロジェネティクス株式会社 (代表取締役) | |
| 2015年~2019年3月 | 群馬パース大学 検査技術学科教授 | 現在の仕事 |
| 2019年4月~ | 群馬パース大学大学院 保健科学研究科 教授 | |



教育活動や不妊治療に関する検査業務を通じてARMT会員の先生方と共同研究を行っている。

支 柱

平成元年(1989年・11月末記す)

過日、群馬県臨床検査技師会より学位取得の経過についての原稿依頼を受けました。まともなコースを進む人に比較してあまりにも長い時間、このために費やしてしまいました。博士の夢は高校卒業の頃ほのかに芽生えたといえます。その意味からすると、紆余曲折の連続ながら初心貫徹出来たことは嬉しい。

今後の生き方を考える上で、これまでを振り返ってみるのも時宜を得た節目と考え思いつくまま記してみたいと思います。学位取得までの私の心の支えに在ったものを読み取っていただければ幸いに思います。



日本海/美保湾から
大山（標高1729m）
を望む

◆旅立ち

私の生まれ故郷は鳥取県の米子市に近い海岸沿いの片田舎でした。小学校5年の時、母親が乳癌で亡くなりました。今と異なり入院生活は付添人が食事の煮焚きを各病室の前の暗い廊下に並べて作っていたことを思い出します(昭和29～30年頃)。しかもこれは国立大学附属病院でした。保険制度も完備した時代ではなく、数年の闘病生活で僅かしか所有していない農地は医療費のため人の手に渡ってしまったようです。続いて祖母もなくなりました。長兄だけ高校は卒業していましたが、次の兄と姉は中学卒業と同時に就職しました。従って私の中学時代は父と2人暮らしでしたので当然、私も中学卒業と同時に一刻も早く就職することが親孝行と考えていました。

兄達が学費を送るから高校に行くことを強く勧めましたが、当時、兄達の悩んでいた学歴社会など知る由もありません。担任の先生も奨学金をもらって進学することを勧めてくれました。しかし当時、思ったことは奨学金貸与される家庭は貧乏人の証のようで、父親に悪いと思い、進学より三菱電機の養成工(会社が独自で教育する技能校)に就職しました(昭和34年)。

担任の先生も『ここならお金を貰った上、教育までしてくれる。こんな素晴らしい所はない』と賞讃の限りで『地元の高校に行くより、よっぽど良い』と勧めてくれました。鳥取県で数名だけ合格出来たことが周囲に対し幼いながら内心得意だったことを覚えています。それだけに現実の世界で知り得た大企業のなかの個人の存在、行き着く先は職工の親方でしかない将来の敷かれたレールを知るにつけ重苦しい雲行きでした。兄貴達が言っていた現実の姿が少しずつ不透明ながら視えてくるようになって来ました。

◆定時制高校から大学へ



大阪府立北野高校
(在籍当時)

養成工の教育中、一人の英語の教師との出会いが決定的な会社との離別を決意する発火点となりました。周囲をみると先輩達も昼間養成工に居ながら夜学の高校に通って大学に進学していることを知りました。

私も仲間と語らって夜学に通うようにしたのです。

この高校は大阪府立北野高校であります。ここで学べた事がたぶん私の基本的な人生観を創ってくれた所と信じています。現在までの中で一番、キラキラ輝く濃縮した青春の一時期といえます。



後半へ続く

